

すべて外れてきた団塊世代に関する予測

二〇〇七年（平成一九年）から団塊の世代が六〇歳代に入り、その多くが現在の職場を去る。今、官僚機構を中心に、これを危機的に語るのが流行っている。数多い団塊の世代が職場を去って年金生活に入れば、財政も年金会計も破綻するばかりか、生産現場は人手不足になり技術技能や経営ノウハウの継承も難しくなる等々である。

しかし、この予測は外れるだろう。これまでも官僚やその追随者の言ってきた団塊の世代に関する予測はすべて外れている。

たとえば、この世代が高校・大学を卒業した六〇年代末、官僚は就職難を予測したが、現実には大の好景気で、人手不足の求人難になった。団塊の世代が需要を広げ、設備投資を誘ったからだ。

この世代がニューファミリー^{※1}となって子育てに励み出した七〇年代、官僚は住宅不足を予測し、住宅公団や自治体の供給公社に何兆円もかけた。だが現実には民間のプレハブ住宅やマンション建設が進み、公団団地はガラ空きになった。

次にこの世代が四〇代を迎えた頃、年功によって高給取りになった団塊の世代が仕事もないまま窓際に並んで企業経営を喰い潰すという「窓際族」論を広めた。しかし、窓際に座った団塊たちは猛烈に働き、多くのプロジェクトをこなしたため、企業利益史上最高のブームになった。

これを見て官僚たちも考えを改めた。中年社員は企業忠誠心に支えられた日本式経営は世界無敵、日本経済は限りなく成長する、と言いだした。とその途端にバブル景気が弾けて日本経済は急落、日本の企業は人員整理や事業縮小を余儀なくされた。

どうしてこれほど間違えるのか、それは、官僚機構が縦割り構造になっており、それぞれが「他の条件に変わりなくせば」という前提で予測するからだ。現実には、団塊の世代は常にすべての条件を、つまり時代を変えてきたのである。

団塊の世代が六〇代を迎え、その多くが定年退職するといっても、働かなくなるわけではない。ほとんどの人は再就職か再雇用か、自ら自営するかで働き続けるだろう。定年は、働きの終わりではない。むしろ、終身雇用にとられない「自由なる労働」への出発である。

戦後型文化の最初の世代

団塊の世代は数が多い。一九四七年から四九年までの三年間に生まれた狭義の団塊の世代は約六八〇万人、これを出生数が二〇〇万人を超えていた五一年までの五年間（広義の団塊）にすれば一〇八五万人、全人口の約九パーセントにあたる。「団塊」とは飲業用語で、堆積層の中で周囲とは成分の異なる要素の塊を指す。団塊の世代は数が多いだけではなく、文化的にも経済的にも他と異なる特性を持っている。

第一に団塊の世代は、「戦争とモノ不足を知らない」最初の世代だ。彼らが物心ついた頃には、日本から戦争も軍隊も消えていた。深刻な食糧難は解消し、衣服も住宅も公共施設も、日毎によくなっていた。このため団塊は、武人的美德を捨てた。男性の勇ましさは嫌われ、優しさが求められた。女性はしとやかさよりも華やかさが好まれた。団塊は、緊急非常の事態を想定せず、人生は予定通りに進むものと思い込んだ。

第二に団塊は、新しい機器と生活環境に育った最初の世代である。物心がついた時からテレビがあり、成人した頃にはマイカーが普及し、現役のうちにパソコンになじんだ。郊外住宅に住み、スーパーマーケットでの無言の買物が慣わしになった。団塊は新しい消費生活の先端に位置している。第三に団塊は「嫁が姑に勝った」世代、つまり核家族のはじまりである。

戦後の高度成長期に、団塊の多くが故郷を出て都市に移り、官公庁や企業に勤めるサラリーマンになった。そこでは親類づきあいも近所づきあいもない。親の世代から生活の知恵を学ぶ必要もな

い。その上サラリーマンには、親から教わる職業上の知識も引き継ぐべき人脈もない。これでは親の世代が家庭での権威と権限を失うのは当然だろう。

団塊の世代は息子や嫁であった若い時期に、親の世代との権限争議に勝った。しかし団塊が親の年頃になった今では、勝負する相手さえいない。

第四に、団塊の世代は「子に残せるのはお金（物的資産）だけ」と考えるようになった。今日、子が社会人になったあともお金を与え続けている親は多い。特に地方在住の高齢者は東京の大都市にいる子や孫に、住宅購入費や結婚費用、年玉など金品を与える。それを悪用した「オレオレ詐欺」まで多発している。

団塊の世代も、そうしなければならぬと思ひ込んでいる。それが年金や蓄えに不安を感じる理由の一つになっている。この国では、子は親離れしたが、親はまだ子離れしていないのだ。

日本は賦課方式の年金制度を採っている。つまり、社会的財政的には現役世代から保険料を徴収して高齢世代に分配している。ところが家計的には、高齢世代が子や孫の世代に援助や贈り物をする。この逆流現象^{※4}のため、子の世代は高額な保険料徴収に苦しみ、親の世代は年金が足りない、と嘆いている。

団塊の定年で「自由なる労働力」が出現

第五の、そして何よりも重要な団塊の世代の特色は、終身雇用と集団主義に漬かった「会社（職場）人間」ということだ。

故郷を捨てて都市に出て会社（職場）に勤めた団塊の世代は、血族社会も地縁社会も失った。それに代わって彼らが帰属したのは職場だった。団塊の世代が就職した時期には、既に日本経済は高度成長期の真つ最中、終身雇用と年功賃金と集団主義の日本式経営が確立されていた。数の多さと変化の先端を行く風圧を感じていた団塊の世代は、職場に安住の場所を求めた。「会社のため」